

障害のある児の母子関係

中村 孝、大久保俊夫、北野市子(静岡県立こども病院)

林 邦雄(静岡大学教育学部)

1. はじめに

母と子はその各々が発現している、有形の、無形の信号によって行動し、お互いに成長を続けているといわれているが、われわれは障害のある児を持つ母親と健康児の母親とを児の各種場面に於ける反応で比較することにより育児態度の差をみようとした。テストには小嶋教授が作成された「母子関係検査法」^{1,2}を用いてたが、これは投影法であり、被検者がうまくその場面に入りこめれば図版上の母子間の交流は実際の母子相互作用を表現するであろうと思われる。60年度は精神発達遅滞児とその母親について検査を行なったが、ここでは59年度に施行した肢体不自由児とその母親の検査結果と併せて障害児およびその母親の特徴を述べてみたい。

2. 検査方法および対象

1)検査方法:こどもの6種の姿態図を順次に示し、その場面に適していると思われる母親カードを8種の裏表から選択し、自分の思う位置に置き、その状況について簡単な話をしてもらう形式で検査をすすめる。使用したこども図版、母親カードは図1のようなものである。成績は1)こども図版に対してどの母親カードが選択されたか、2)こどもと母親の距離、3)物語の内容(働きかけは母子のどちらから起きているかなど)から成り立っている。

2)対象:検査し得た症例は肢体不自由児17例と母親20例、精神発達遅滞児21例と母親19例であり、対照群には健全な幼稚園児の母親38名、小1,2,3年生の学童60名を用いた。肢体不自由児は男児12名、女児5名、平均年齢8歳2月(7歳2月—10歳3月)で、そのIQの平均は96であった。精神発達遅滞児は、はじめに知能検査を行

い検査可能のものを選び出したが男児9名、女児12名で平均年齢は13歳3月(8歳3月—17歳10月)、その精神年齢(言語性)の平均は6歳7月であった。

3. 検査成績

A. 母親の検査成績

1)母親カードの選択:こども図版(C1—C6)に対して選ばれた母親カードの順位は表1に示すように肢体不自由児(PH児と略す)、精神発達遅滞児(MR児と略す)の母親に於いても健全児の母親と大きな差はなかったが、こども図版毎に選択カード、選択率を検討すると微妙な差がみられる。

a. こども図版C1:対照群ではM-5が26.3%、M-2が23.7%の順になり、両者で50.0%が選ばれたのに対し、PH児ではM-2、M-5が共に40.0%づつ選ばれ、この両者で80.0%になり、MR児でも同様にM-5が47.4%、M-2が31.6%、この両者で78.0%を占め、PH児、MR児ではM-2、M-5を集中的に選択しているようである。

b. こども図版C2:対照群でM-2、M-7の順であったものがPH児ではM-7、M-2の順に逆転していること、MR児ではM-2が高くM-7を選んだものは1名の5.3%であったことが特徴である。

c. C3は3群ともM-5が第1位に選ばれているが、その選択率はPH児で高い。

d. C4ではM-2が第1位に選ばれ3群ともほぼ同じ選択率であった。

e. C5ではM-2が第1位であることは同様であったが、選択率にやや差がありP群、MR群で高く、第2位は対照児、MR児がM-3を選んだの

に対しPH児ではM-5が高率に選ばれていた。
f. C6は対照児ではM-8が、PH児ではM-4が、MR児ではM-2、M-5が第1位に選択されていた。

以上のことから幾つかの推論がだされる。

- a. M-2、M-5カードは好まれるカードであるが、障害のある児の母親の方が多く選ぶ。これは手を差し述べる姿態が自分の気持ちに近いからであろう。
- b. こども図版からイメージするわが子場面が異なっているための差が出ている。例えば、C1図版では、対照群には転んでいるとみる他、ふざけている、駄だをこねているとみる人もかなりみられたが、障害のある児の母親はほとんどが転んでしまった、倒れているとみるために手を差し述べている(M-2、M-5)ようである。C2では、対照群にかくれんぼと泣いているとみるものが多く、かくれんぼの姿態としてM-7がみられるのであるが、PH群では泣いているとみて私も泣きたくなくなってしまうという表現がでてM-7が多くなっている。
- c. 障害児の母親にはふざける、茶化す、たしなめるなどのポーズが少ない。対照群にみられるような、例えばC2でこどもが泣いているので、こちらも泣く真似をしてみせる(M-7)、C6で友達がいなかったというので、では独りで遊びなさい(M-8)というような場面が出ていない。

2) 母子間の距離: こども図版毎の3群の母子間の距離を図2に示した。

肢体不自由児(PH児)、精神発達遅滞児(MR児)両群ともに対照児群より母親カードを近く置く傾向がみられた。図版すべてを合計した母子間距離は1%の有意差で障害群の方が近かった。図版毎にみるとPH群ではC5、C6図版において、MR群ではC2、C3、C5図版で明らかな近距離が認められ、PH群とMR群では若干の差がみられた。PH群でC6が近い例にM-8を採用して「親子ともどもわびしく帰る」、M-

5をとり上げ「叱ったらしょんぼりしている、あわてて追い掛けてなぐさめる」などがあつた。MR群のC2で近く置く例ではM-8を採り「またいじめられたの、この人いつもいじめられているのだから」、M-6を選んで「なにかで頭を打ったのじゃないと近寄って抱き上げる」といったものがある。C3は対照群でははしゃいでいるとみて子から離れるポーズであるがMR群では「きょうほめられたよといってとんでくる。そう、よかったねと抱き寄せる」となる。

3) ストーリーの分析:

- a. 母子関係の知覚: 母親が作ったストーリーは母子のどちらから働きが起きているかをみる分析である。図3のごとく母から児へはMR群に多く、児から母へは対照群に多くみられた。また母子同時、母子併立はPH群に多かった。
- b. 母親行動: ストーリーに出ている母親の態度を親和、寛大、支配、攻撃、拒否、不明、叙述、欠如の8項目に分類すると、親和が最も多く、支配、攻撃、不明と続く順序は3群とも同様であった。
- c. こども図版毎の検討は例数が少ないので十分には行なえなかったが、代表としてC2図版を取り上げ調べてみると、この図を泣いているとみた母親は対照群で30/38(78.9%)、MR群で16/19(84.2%)とほぼ等しかったが、この人たちの話した母親行動は対照群で親和53.3%、支配33.3%、攻撃13.3%であったのに対し、MR群では親和81.3%、支配12.5%、欠如6.3%となり、親和(よい子だね)が多くなって、支配(やめなさい)が減少し、攻撃が消失する。
- d. こどもの母親に対する態度: これもストーリーからこどもの態度を親和、依存、攻撃、拒否、不明、叙述、欠如と分類するものであるが、その結果は対照群の親和がMR群の親和よりやや多く(5%有意差)、MR群で叙述が対照群より多い(5%有意差)というのみでその他の有為な差はみられなかった。

B. こどもの検査成績

同様のテストを肢体不自由児(PH児)、精神

発達遅滞児(MR児)に行ない先に施行した健常な小学校児童の成績と比較を行なってみたが母親カードの選択、母子間の距離においてPH児は対照群とほぼ同じ傾向であったがMR児に多少の差がみられた。

1)母親カードの選択(表2):こども図版C2、C3、C5、に対し健常児、PH児はM-2を第一位に採選択したがMR児はM-5を第一位とした。動きのないM-2より近寄る動作を好むのであろうか。C4図版では健常児、PH児がM-2を選んだのに反しMR児はM-4を一位にしている、壁に背をもたせてしゃべりしている図に対して何故腕組みのポーズを選んだのか興味あるところである。

2)母子間の距離:3群とも差がなかった。

3)ストーリーの分析:ここでは a)母子関係の知覚で母子同時と母子無関係がMR児に多く、母から子へのMR児に少なかった。b)母親行動、c)こどもの母親に対する態度ではPH群、MR群ともに不明、叙述、欠如が多くなっており、テストの意味を理解すること、図版からストーリーを作ることの困難さがうかがえた。

4. 考案

以上考案を交えながら検査成績を述べてきたが、本テストをPH児、MR児とその母親に施行した時一母親にいわれた「うちの子と状態が違うので答えにくい」という感想をぬきにしては正しい解釈は出来ないであろう。しかし障害のある児をもつ母親の思慮、行動は概してストレートであり、こども図版から転んだ、打った、泣かされたと想像し、近寄る姿勢があり、健常児の母親にみられるふざける、茶化す姿勢がないことが一つの大きな特徴であった。このことは作られたストーリーにもみられ、概して過保

護であり、母親からの働きかけが多く、しかもそれが一方通行である状態がみられた。それに対し児側は明瞭ではないが、健常児と似た見方をしているようで自分の行動を評価し、時には叱られることも覚悟しているようであった。これはとくにPH児に明らかであった。

この母子関係検査法を用いた臨床成績を、小嶋²⁾が収録しているが、母子間の距離についていえば、喘息児ではこども、母親ともに対照と変わりなく、自閉症児の母親は距離が大きくなり、ダウン症の母親、就労している母親も遠くに置くという。われわれの入院児の母親の検査では近くであった。精神発達遅滞児の母親では市瀬³⁾は離して置くといい、宮崎⁴⁾の研究でも母子間距離は離れていた。今回のわれわれのテストではMR児の母親は有意に母親カードを近く置いた。これは最近の医療情勢から母親がこの疾患を受容しはじめたためであろうと考えている。今回は本検査を横断的に用いたが、これを縦断的に使用することによりさらに正確な情報が得られると思われる。

文献

1. 小嶋謙四郎:母子関係検査法解説 安田生命社会事業団 1966
2. 小嶋、秋山、空井:小児の臨床心理検査法 医学書院 1973
3. 宮崎美千代:児童臨床における家族関係研究 日本心理学会 1977
4. 中村 孝他:児の入院に対する母親の心理反応 周産期医学 13:2028,1983
5. 中村 孝他:厚生省心身障害研究:母子相互作用の臨床応用に関する研究 昭和 55,56,57,59 年度

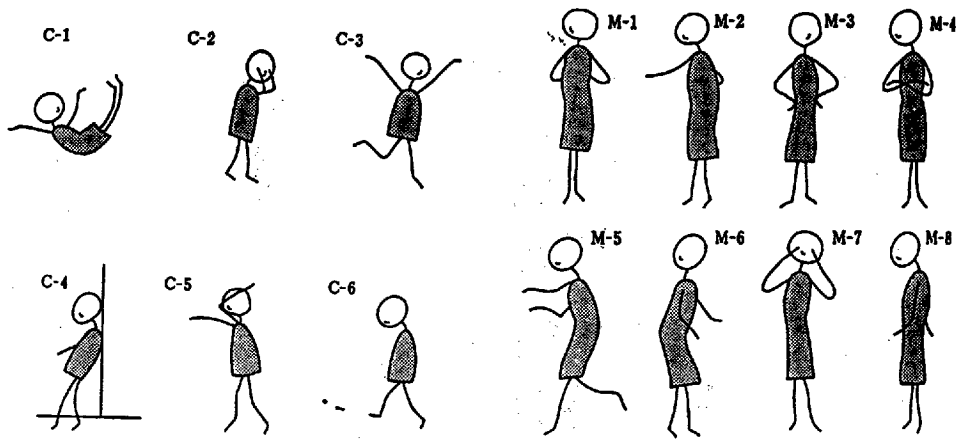


図1 検査図版

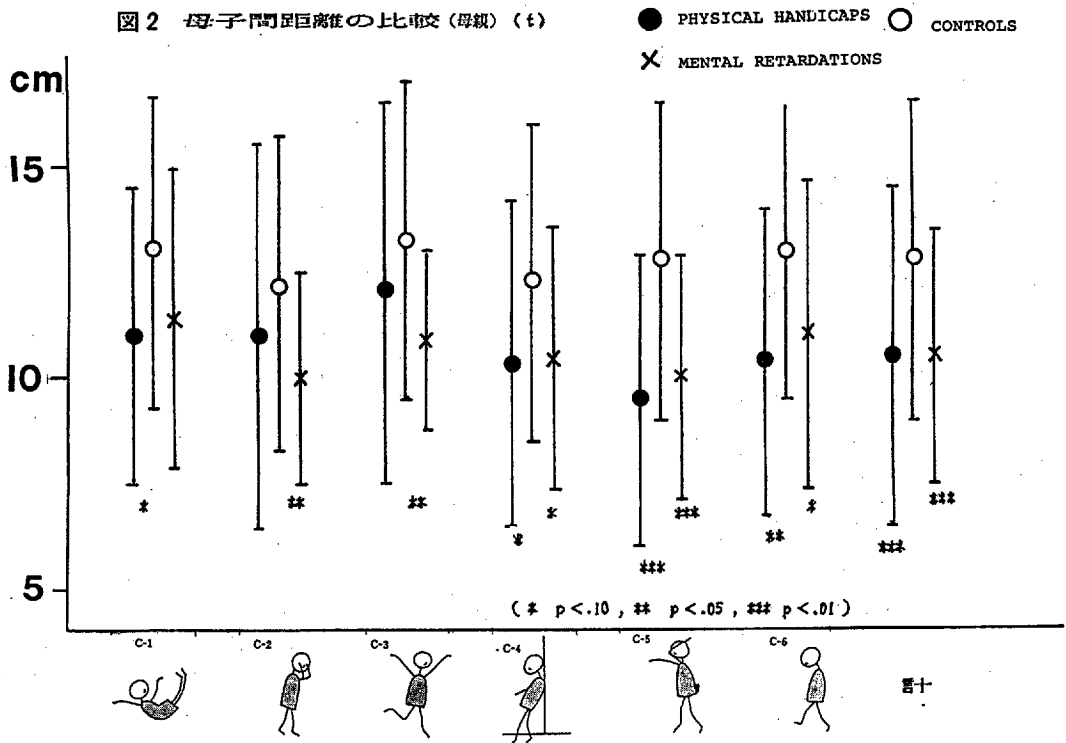


図3 母子関係の知覚(母親)

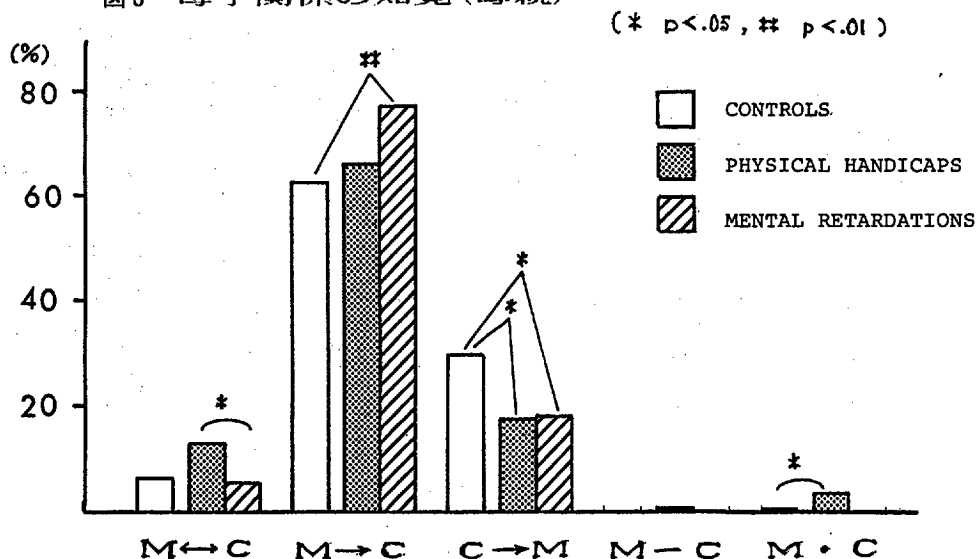


表1 母親カードの選択率(母親)

こども図版NO.		第1位 (%)	第2位 (%)
C 1	CONTROL	M-5(26.3)	M-2(23.7)
	PH	M-2, 5(40.0)	
	MR	M-5(47.4)	M-2(31.6)
C 2	CONTROL	M-2(31.6)	M-7(15.8)
	PH	M-7(25.0)	M-2, 3, 6(20.0)
	MR	M-2(52.6)	M-5, 6(15.8)
C 3	CONTROL	M-5(39.5)	M-1(21.1)
	PH	M-5(60.0)	M-6(15.0)
	MR	M-5(42.1)	M-1, 6(21.1)
C 4	CONTROL	M-2(26.3)	M-4(18.4)
	PH	M-2(30.0)	M-8(25.0)
	MR	M-2(36.8)	M-3(26.3)
C 5	CONTROL	M-2(21.1)	M-3(18.4)
	PH	M-2(40.0)	M-5(25.0)
	MR	M-2(36.8)	M-3(15.8)
C 6	CONTROL	M-8(26.3)	M-2, 4(18.4)
	PH	M-4(25.0)	M-2(20.0)
	MR	M-2, 5(26.3)	

表2 母親カードの選択率(こども)

こども図版NO.		第1位 (%)	第2位 (%)
C 1	CONTROL	M-5(46.7)	M-2(31.7)
	PH	M-5(41.2)	M-2(23.5)
	MR	M-5(52.4)	M-8(14.3)
C 2	CONTROL	M-2(28.3)	M-5(25.0)
	PH	M-2(29.4)	M-5(23.5)
	MR	M-5(23.8)	M-2(19.0)
C 3	CONTROL	M-2(23.3)	M-5(21.7)
	PH	M-2(29.4)	M-8(23.5)
	MR	M-5(33.3)	M-2(23.8)
C 4	CONTROL	M-2(20.0)	M-4(18.3)
	PH	M-2, 6(23.5)	
	MR	M-4(33.3)	M-3(23.8)
C 5	CONTROL	M-2(23.3)	M-3(20.0)
	PH	M-2(29.4)	M-4, 5(17.6)
	MR	M-5(28.6)	M-2, 4, 8(14.3)
C 6	CONTROL	M-2(23.3)	M-8(21.6)
	PH	M-5, 8(29.4)	
	MR	M-8(28.6)	M-2, 4, 5(19.0)

障害児保育における父親の参加の意義に関する研究

巷野悟郎、金平文二、後藤嘉余子、鈴木裕子(東京家政大学)

芝辻益子、上野己美子(東京家政大学、わかくさグループ)

岡 愛子、小林幸江(志村保健所)

はじめに： 幼児をもつ母親の育児上の負担は、身体的・精神的に多大なものである。家庭における父親不在と言われて久しく、母子の孤立化やマスメディアによる情報の氾濫が、母親の不安をより高める傾向にある。健全な子どもの養育においてさえ多くの不安を伴うものであるが、発達上の歪みや遅滞を呈する幼児をもつ母親は、より複雑な諸々の問題に対処していかなくてはならず、より一層の困難を極めるものと考えられる。精神的に不安定になりやすい障害児の母親にとって、日常生活における家族や社会の理解と協力は、自己の確立を援助し、子どもの受容や養育意欲を喚起するものとして必要不可欠なことであり、母親が安定した心情のもとで、子どもの成長発達を的確にとらえた対応をすることが、養育効果を最大限に発揮させる重要な一因と推察される。

現在まで、母子相互作用研究班による諸研究をはじめとして、母子関係の重要性については多くの指摘がなされている。しかし近年は父親についても、子どもの養育という視点からの問題提起がなされてきている傾向がうかがえる。

そこで我々は、障害をもつ幼児の社会化をはかると共に、母親を支えるものとしての父親の存在に着目し、障害児保育における父-母-子という関わりの中での父親の役割の重要性を明らかにしようと本研究を試みた。

対象： 東京家政大学・障害児通園施設(通称わかくさグループ)に通室する幼児の両親である。当グループは板橋区に位置し、区からの助成金を受けて運営されており、在室児は言葉や

行動に遅れのある2歳から4歳の幼児9名である。週2回の集団指導と、週1回の個別指導を実施している。入室時には発達検査や身体状況の把握、養育環境についての詳細な資料を得ると共に、入室後は継続的に成長発達の把握を行っている。また当グループでは、子どもの理解や問題の認識を深めることを目的として、入室時より母子同室で保育をすすめている。さらに父親の保育参加や母親への援助の必要性が高いことをかんがみ、定期的に父親の保育参観を実施している。

方法： 在室児の両親に家庭での父親の様子(子どもとの関わり・母親との関わり)と父親参観についてのアンケートを作製し回答を求めた。父親には自己評価を求め、母親には母親からみた父親についての評価を求めた。また父親参観日を年3回(3月・6月・11月)行い、実際の保育場面に父親が参加する機会をもち、父子交流の様子をVTRに収録した。さらにその後の父親懇談はその内容をテープに録音し資料とした。

結果と考察： 対象児のプロフィールと父親については表1のとおりである。

父親は概して子どもへの関心が高く、積極的に対応していこうとする姿勢が表1やアンケート結果より認められる。子どもの発達状態、個々の行動に対する不安感の高いことは認められるが、反面問題の本質の理解が不十分である点が指摘される。しかし母親まかせにするのではなく、自らも子どもの理解に努めようとする姿勢は十分に評価されるものであろう。

また実際の家庭での父親の様子を領域毎にみ

ると(表2)子どもへの関わりについて、食事・入浴というような触れ合いをもとうとする傾向の強いことがうかがえる。帰宅時間が早いとはいえない父親が、「今迄はやることを全てやって帰っていたが、今は早く帰るように仕事のやり方を変えてきた」と懇談の場でも述べているように、父親の意義の変容が、仕事の量や質の調整をはかり、家庭生活を充実させようと努力している様子がうかがえる。母親への援助についても、家事労働や子どもの世話を通して、母親の負担の軽減化をはかることがうかがえる。また子どもとの遊びに関しては、父親と母親との評価間に差異があり、父親の過大評価が認められる。内容を検討すると、動的な遊びに関してその傾向が顕著であった。

次に保育参加時の父親の様子についてみると、(表3)最初は動作もぎこちなく、視線も定まらずにいた父親が、セラピストの行動をみることや、場への慣れによって、徐々に子どもの活動に合わせた行動をとるようになっていった。また自分の子どもだけでなく他の子どもへも関心を示し、相手になるなど実際の活動をとおして、多少なりとも子どもを中心とした行動が体得されたようである。父親参観に臨む気持は不安で気が重かったとどの父親も述べており、積極的な参加の姿勢とは言い難かったが、あえて参加するという子どもへの愛情と意欲は、十分に評価されるものである。また参加することによって父親自身も問題点の把握・現状の認識など、得ることが多かったことが懇談のようすからうかがえる(表4)。

懇談時における内容を検討してみると、具体的、個別的な問題提起や、父親自身の心情・姿勢、集団の中での子どもの様子をふまえた子どもの見方、さらに母親の理解、気持の安定への配慮をはじめ、母親を支えることの重要性の認識など、多くの点が指摘され、父親の自覚を促進させる効果があったと考えられる。

参観後の父親の変容についてみても、(表5)参観前より身近な存在として子どもを意識するよ

うになり、積極的に子どもの問題に取り組み、母親を援助していこうとする姿勢を助長しているといえよう。母親からも同様に、父親の積極性を認める結果がもたらされている。

以上のことから、父親の保育参加によって夫婦間のコミュニケーションがよくはかれるようになり、母親の精神的な安定に寄与し、両親で協力して問題解決をはかろうとする姿勢を喚起する効果がもたらされたことが推察される。

要約： 障害児保育における父親の参加の意義について、家庭内での様子の把握と参観時の様子、懇談の内容から考察をすすめた結果、以下の諸点が明らかにされた。

1. 家庭内の父親の参加に、父母間の差異は認められるが、協力して問題解決にあたらうとする姿勢は十分に認められる。
2. 参観時の時間的経過にそって、父親の子どもへの関わり方に変容が認められ、子どもに合わせた行動をとるようになった。
3. 保育参加後の懇談では、母親と協力して問題解決をはかろうとする気持や、子どもの理解を深めたことが報告され、自分自身の考え方、生き方の方向性を変容させる契機をになったことがうかがえる。

まとめ： 父母の協力体制のもとで、より効果的な子どもへの対応がはかられ、それが子どもの成長を助長する誘因となる。父親はややもすれば傍観者的な立場をとりやすいが、保育体験を通じて、子どもの理解、母親への援助が従来と異なる方向性を示す傾向がうかがえる。その場で感じとったことを実際に行動化する時、父親は母親の良き理解者となり、父親としての自覚を高揚させることになっていくのであろう。父親が、今何をすることが最も必要かを試行錯誤しながらも体得しようとする姿勢が、母親の精神安定をはかり、子どもの成長を援助することにつながる。その動機づけの一要因として父親参加は意義あるものとして位置づけられるの

ではないだろうか。

父親の保育参加は、具体的な関わり方についての情報を提供し、父親の自覚を高揚させる意味でも有意義であり、母子への理解、援助を強化する結果をもたらすことが示唆される。父親参加を継続的に行うことによって、より一層の実際効果をもたらすことが期待されるであろう。

参考文献

藤田萬里子:乳幼児のいる家庭における父親の育児家事行動 第32回日本小児保健学会講演

集(1985)

窪 龍子他:父親の育児に関する認識と実践について(第2報) 第29回日本小児保健学会講演集(1982)

窪 龍子他:父親の育児に関する認識と実践について(第4報) 第31回日本小児保健学会講演集(1984)

佐野良五郎:父子交流に関する調査(第2報) 幼児期の場合 第31回日本小児保健学会講演集(1984)

表1. 子どもの特徴と父親のとらえ方

名前(性別)年齢	DQ	子どもの特徴	父親のとらえ方・希望等
MM(♀)4:2	82	新しい場面への緊張感が強い、言葉によるコミュニケーションが可能となって、対人関係も広がりを見せてきている。過度の慎重さが適応や運動面の発達に影響しているようである。	動作は活発になってきたが、慎重すぎる面は変わっていない。幼稚園に入園した場合、他児と共に行動できるかどうか不安である。父親に話しかけたりまつわりつくことが多くなってきた。子どもへの接し方を知りたい。
TT(♀)4:1	85	落ち着きがなく無意味な動きが多い。言葉は二語文程度で少々複雑なことになると、まだ理解できないところのみられる。	兄と行動を共にしているせい、好みも言葉も女の子という感じがしない。
AS(♀)3:7	99	人との関わりが稀薄で、動きまわることが多い。言葉も理解に比べ発語が遅れている。しかし、徐々に目的的に行動するようになってきている。	発語の遅れが心配である。他児との遊びもできるようになってほしい。
TS(♂)3:4	52	母親以外の人との関係がもてず、単語が3~4語みられる程度である。身体発育も未熟で全体的に発達の遅れが認められる。	個々の行動については変わった点もあるが、基本的には変化しているとはいえず、将来に不安が多い。参考になる情報が少ないので具体的なアドバイスが欲しい。現在子どもとは毎日散歩をすることで交流をはかるよう心がけている。
HM(♂)3:4	78	無意味な動きが多く、目は合うものすぐそらせてしまう。相手をすれば応じるが自分から求めることはない。思い通りにならないとパニック状態になる。生活習慣は年齢相応に自立し、語彙量は増加の傾向にある。	多少言葉の理解は可能になってきたが、話せるようになるか心配である。個人面談等の時間をとってほしい。
HS(♂)3:2	94	母親への依存が強く、生活習慣の自立や対人行動面に遅れがみられる。	言葉が増え行動も積極的になり、健常児と変わらないので安心して接することができるようになった。しかし、母親への依存が強すぎて気の弱い男の子になるのではないかと心配している。子どもの成長を具体的に知らせてほしい。
MK(♀)3:1	56	人や物への関心が薄く、言葉は話さず視線も合いにくい。しかし、時折求める身体接触に応じると多少喜びの表情がうかがわれる。	特に関心をもっていない。
AN(♂)2:10	81	母親に抱かれて通室する。全面的に依存している。他児・遊具に関心を示すが、行動が伴わない。生活習慣の自立や発語面の遅れが目立つ。	自分で歩くようにした結果、物事の理解はすんだが喉が思うようにならない状態である。
MH(♀)2:9	48	いろいろな物や人に関心を示し、感情表現も豊であるが、発語はほとんどなされない。全体的に遅れがみられる。	2歳後半になってもまだ発語がみられず、少々発達が遅れているのではないかと心配している。

DQは運鏡式分析的発達検査結果

表4. 父親懇談における意見 (テープより)

父親の心情 24	<ul style="list-style-type: none"> ・比較する必要はないと言われても比較せざるを得ない。 ・何かしなくてはと思うがどうしてよいかわからない。 ・子供のことを真正面から真剣に考えることを避け逃がしている。 ・育てかたが良かった悪かったではなく、結果としてこうなったので誰の責任でもない。 ・このまま3歳になってほしくない。 ・仕事という逃げ道に月曜～金曜まで逃がしている。 ・子どものことを考えた仕事の仕方をしなくては、と思うようになった。 ・子どもにすることは良いと信じて、効目があると信じていないと辛い。 ・親自身が変わりつつあるかなと思う。 ・子どもについて波がある。これでいいのかと迷ったり大丈夫だろうと思ったり割り切れない。
父親の関わり 11	<ul style="list-style-type: none"> ・月曜～金曜までは仕事で忙しく、土・日曜しか接していない。 ・休みの日しか相手になれない。 ・忙しくてかまってもやれない。 ・短気になってしまう。 ・子どもと一緒に何かすると、最初は自分のベースだったが、今は子どもの様子を見ながらできる。 ・遊びかたが下手。 ・今までは仕事を全部終えてから帰ったが、考えかた仕事の仕方を改めて、子どもと過ごす時間をとるようにてった。
母親への理解・配慮 17	<ul style="list-style-type: none"> ・他の子どもより遅れていることが負目になっている。 ・考えかたや行動が消極的。 ・人の何気ない言葉がズキンとくる。 ・父親はしょうがないと思うことも母親にはこたえる。 ・遅れているという強迫観念に常に追いかけられ、不安定な心理状態だとおもう。 ・自分で殻に閉じ籠もってしまう。 ・子どもに対する責任を強く感じている。 ・目標をもって追いつききれない現実には、厳しいとおもう。 ・できるだけ明るくして、二人で落ち込まないようにしている。 ・子どもの問題が母親の責任だとは思わない。 ・同じ立場にたつと同方向にすすんでしまうので、別の視点で考えるようにしている。 ・母親に文句をいわない。
子どもの把握 18	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びが偏っていたが、他にひろがりつつある。 ・出来なかったことが出来るようになった。 ・今までは何でも無視していたが、一つ一つわかるようになってきている。 ・話すようになった。 ・他の子どもと関わろうとするようになった。 ・臆病なところがまだある。 ・子ども同士の関わりがすすんできた。 ・遊びが進歩してきていると思う。 ・前回に比べ成長の跡がうかがえる。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの将来に対する不安。 ・親の意識と今後の関わりかた。 ・グループの活動と参観に対する意見。

表5. 参観後の変容

順位	父親	母親
1位	子どものことを考えることが多くなった。	子どもの話をよくするようになった。
2位	子どもの話をよくするようになった。	子どものことを考えることが多くなった。
3位	父親としての自覚を強めた。 可愛いと思うようになった。 子どもについての不安が少なくなった。	父親から子どものことを聞くようになった 父親としての自覚を強めた。 母親に協力しようと思った。 自分から子どもと遊ぶようになった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1.はじめに

母と子はその各々が発現している、有形の、無形の信号によって行動し、お互いに成長を続けているといわれているが、われわれは障害のある児を持つ母親と健康児の母親とを児の各種場面に於ける反応で比較することにより育児態度の差をみようとした。テストには小嶋教授が作成された「母子関係検査法」¹²を用いたが、これは投影法であり、被検者がうまくその場面に入りこめれば図版上の母子間の交流は実際の母子相互作用を表現するであろうと思われる。60年度は精神発達遅滞児とその母親について検査を行なったが、ここでは59年度に施行した肢体不自由児とその母親の検査結果と併せて障害児およびその母親の特徴を述べてみたい。